

Saish Chandra (ed.)

*Indian Ocean. Its History, Commerce
and Politics*

生 田 滋

一

最近インド洋をとりかこむ、いわば環インド洋圏というか、インド洋世界の國々の歴史を、インド洋そのものを一つの鍵として綜合的に理解しようという動きが見られる。こうした傾向の出発点となつた業績としてはオーギュスト・トゥサンの『インド洋の歴史』(原著は一九六一年刊、英譯は一九六六年刊)をまずあげることができる。これは古代から現代に至るインド洋世界の歴史の概観であり、この方面での先驅的業績といえるものである。こうした研究の出現の契機となつたのは誰しもが説く通り、フルナン・ブローデルの『フェリベ二世時代の地中海と地中海世界』(初版は一九四九年刊、第二版は一九六六年刊、その英譯は一九七二年刊)の刊行である。ブローデルはこれまで各國、各地域ごとにはばらばらに研究されて來た地中海周邊の諸國の歴史を、「地中海」という鍵を用い、「地中海世界」として綜合的に理解しようと試みた。彼がフェリベ二世の時代(一五五六—一五九八)をとりあげたのは、いうまでもなくこの時代に地中海世界におけるヨーロッパの優位が決定的となつたからにはかならない。

地中海と地中海世界についてのこのような試みはインド洋とインド洋世界の研究に對しても直ちにその影響を及ぼした。前に述べたトゥサンの研究はその一例である。

もちろん地中海とインド洋とはさまざまなちがひがある。その大きさはもちろんのことであるが、インド洋はその周圍が完全に陸地にかこまれているというわけではない。しかし南のほう、つまり南水洋に接する海域はもともと人間の活動する舞臺ではなかつた。従つてこの海域を一應無視し、ほぼ喜望峯とオーストラリア大陸の南端を結ぶ線から北の部分を考えてみると、そこは古くから海上交通のさかんに行なわれた海域である。こうした意味においてインド洋とインド洋世界の歴史を統一的に考えることは、決して不可能とはいえない。

インド洋はまたベルシャ灣、紅海を通じて地中海世界に接し、マラッカ海峡を通過して南シナ海に出ればやがて中國に達する。このように考えれば、インド洋世界の歴史を綜合的に研究することは、地中海世界や中國との關連においても重要である。こうしたことは各國の研究者の共通の認識となり、その結果多くの著書、論文が發表されるようになった。そうした著書の一つとしてK・N・チョードリーの『インド洋における貿易と文明。イスラムの勃興から一七五〇年までの經濟史』(一九八五)をあげることができる。同書はいわばブローデルの研究方法をそのままインド洋世界にあてはめたようなところもあるが、その目的とするところはむしろインド洋世界の主體性を強く主張するところにあるといえる。そうした意味で同書はきわめてすぐれた業績である。

もちろんインド洋世界の歴史を一個人が獨力で研究することはで

きない。それは當世流行の國際的學際的共同研究にとって絶好のテーマである。従つてさまざまな形で共同研究、國際セミナーが行なわれて來た。本書とはほぼ時を同じくして刊行されたアシン・ダス・グプタ、M・N・ピアスン共編の『インドとインド洋——一五〇〇—一八〇〇』は共同研究の一つの例であるが、同書については本誌に別に書評が發表される由なので、ここではとくにふれない。そして本書は國際セミナーの成果として刊行されたものの一つなのである。

本書の編者サティシュ・チャンドラ教授については私は特に詳しくは知らないが、インド史の専門家として著名な人物で、ニューデリーのジャワハル・ネルー大學史學科教授であり、また東京の國連大學の役員をつとめておられる由である。氏の關心はとくにインド近代史にあるようで、本書の著者紹介によると、氏の最新の業績は『インドにおける十八世紀。その經濟とマラータ族、ジャート族、シーク教徒およびアフガン人の役割』（一九八六）である。本書に收録された論文は一九八五年二月にデリーで開催された「インド洋國際セミナー」で發表されたペーバーの中から選ばれたものである。もっともそれがどのような規準に基いて選擇されたものであるかははっきりせず、また、これは大事なことであるが、編者が一定の規準ないしは觀點から選擇したのかどうかも明言されていない。本書には序論を合せて十三編の論文が收録されており、さらに著者紹介、索引が附されている。序論の内容は他の各論文の内容の紹介とその位置づけなので、ここではまず他の十二編の内容を簡単に紹介してみよう。

二

二、シャルル・フェルリンドン「インド洋。古代と中世」（二七一—五三ページ）。著者は前近代ヨーロッパ、とくにスペイン、ポルトガル、フランスの海外發展史の研究者として著名であり、現在はブラッセルの海上交通史國際委員會名譽會長の職にあり、クセジュ文庫『コロンブス』（白水社）の著者である。著者はこの論文で古代から十五世紀までのインド洋の海上交通の歴史を概観している。

著者はまずインド洋の地理的環境を説明したのちに、主として『エリュトラ海案内記』に基いて、古代のアラビア海の海上交通の歴史を述べている。著者は季節風を利用してアラビア海を横斷する方法は「ヒッパロス」によつて發見されたものではなく、インド人がこれを利用して西方に航海していたのを、たとえばギリシャ人、ローマ人が學んだのであつて、ヒッパロスも個人の名前ではなく、季節風を指す普通名詞であつたと述べている。著者はさらにアラビア海の海上交通でアラブ人はたした役割の重要性、ベンガル灣の海上交通を通じてイスラムが東南アジアへ傳えられたこと、および中國船がインド洋に進出したことについて述べている。著者は十四世紀からポルトガル人進出直前までのヨーロッパの進出について簡単に觸れたのちに、航海技術、とくに羅針盤の發達、貿易に關するアラビア語史料の重要性などについて觸れ、さらにインド洋南部の海上交通についてマダガスカル島を中心として論じ、最後に今後の研究には海中考古學の成果が重要であることを論じている。ギリシャ語、ラテン語、アラビア語およびその他のヨーロッパ諸言語の史料の利用はいうまでもなく充分に行なわれているが、中國船の活動や

東南アジア關係の記述は平板でものたりない。また註がついていないのは残念である。

三、R・A・L・H・グナワルダナ「インド洋における航海方式の變化と、植民地期以前のスリランカに對してそれが與えた衝擊」(五四―八九ページ)。著者はスリランカ大學ベラデニヤ校教授で、歴史學專攻である。その主著『僧衣と鋤。中世初頭のスリランカにおける僧院制度と經濟的關心』(一九七九)は讀まれた方も多いことと思う。著者の主たる關心は、シンハラ族は古代においてはさかんに海上活動を行ったとされているのに、近代においては海上活動にまったく關心を示さないと評價されているが、實際はどうであったのかを明らかにしたいということにある。著者は『エリュトラ海案内記』など、いわば外國史料をひろく利用するほか、スリランカの碑文、歴史記述などを涉獵して、いわばスリランカ中心のインド洋海上交通史の輪廓をたくみに描き出している。漢文史料の利用も翻譯を通じてではあるが積極的に行なわれている。彼の議論の中でとくにわれわれにとつて目新しいものを二、三紹介してみると、海上交通で大型の筏のはたした役割が非常に大きかったこと、インドとスリランカとの間のバルク海峡がインド西海岸およびアラビア海と、インド東海岸およびベンガル灣との間の交通に非常に重要であったことなどである。そして著者はスリランカが十三世紀以降インド洋の海上交通に重要性を失なうのは、船舶の大型化に伴つて、バルク海峡が航路として使用されなくなつたためであると論じている。非常に興味深い指摘であるが、このことと、内陸部における農業の發展とがどのような關係にあるのか、さらに知りたいところである。

四、ロティカ・ヴァラダラジャン「はば九世紀より十三世紀までの南海貿易における商品構成とインド人の貿易への参入」(九〇―一〇八ページ)。著者は編者と同じくジャワ・ハルラル・ネルー大學美學藝術學部準教授で、美術史、海上交通史、社會經濟史の分野で多くの業績を發表している。最近の業績としては十七世紀末のフランス人フランソワ・マルタンのインド旅行記の英譯がある。著者はこの論文でインド洋という代りに「南海」という用語を使用しているが、これはこの時期の國際貿易の一つの中心が中國であつて、國際貿易を検討するためには、インド洋と東南アジア地域をあわせて考えなければならず、そのためには「南海」という用語がもつとも適していると判斷したからである。著者はまず南海貿易の商品構成を記述しているが、残念ながら羅列的であつて、構造的な把握はなされていない。ついで著者は南海貿易におけるアラブ人のはたした役割を記述し、インド人は十一世紀以降アラブ人がこれらの地域から撤退したのちに、そのあとを埋めるようにして進出したのであり、それも主としてベンガル灣方面へのことであつたとしている。ただし著者の説明は必ずしも説得的ではない。

五、ハラプラサド・ライ「十五世紀における中國と『西洋』」(一〇九―一二四ページ)。著者は同じくジャワ・ハルラル・ネルー大學準教授で、十五世紀の中印關係を專攻している。著者はまず中國が南海を東洋と西洋にわけける根據とその範圍を論じ、ついで漢文史料に基いて鄭和の西征の經過をかなり詳しく論じている。ただし著者は日本語(たとえば山本達郎)、フランス語(たとえばベリオ)の業績をまったく参照しておらず、またそうすることが必要であるという意識も見えない。漢文史料が讀めるならばそれですべてが明らか

かになるというものであるまい。いささか近視眼的な研究態度といわなければならない。

六、ニールス・ステーンスガールド「インド洋ネットワークと世界經濟の出現（一五〇〇頃—一七五〇頃）」（二二五—二五〇ページ）。著者はコペンハーゲン大學の歴史學教授で、彼の主著『十七世紀のアジアにおける貿易革命』（一九七四）はよく知られている。著者はインド洋世界における貿易の役割を大きくみることに對しては必ずしも賛成せず、富は内陸部の農業地帯に偏在していたと考えている。従つて貿易港の役割も遠隔地貿易においてはたす役割よりは、地方的な役割のほうが大きいと考えている。また同時に著者は十六世紀にはじまるヨーロッパ人の進出はインド洋世界の貿易構造に大きな變化をもたらしたわけではなく、ヨーロッパ勢力の貿易活動は少くとも十九世紀に入るまでは、むしろインド洋世界固有の貿易活動、とくにグジャラートを中心とする國際貿易を強化するような方向に働いたと論じている。結局のところヨーロッパ勢力はゴアとバタヴィアという二つの「反中心的センター」を作りあげたに過ぎなかったというのが著者の考えである。そして十八世紀に入るとグジャラート地方の中心港であるスーラトとバタヴィアがたがいに対抗する形でセンターとなるが、やがて十八世紀の中頃からはインド洋世界とヨーロッパとの間の貿易量の増大、インド洋世界各地における海軍の發達によつて、それがむしろ多極構造へと變化して行き、スーラトの没落と相俟つてインド洋世界独自の貿易構造は相互に關連のないさまざまな現象の結果として崩壊し、十八世紀の後半からはヨーロッパ世界の國際貿易構造の一部として再組織されて行くというのが著者の主張である。

七、ブリトヴィッシュ・ナグ「インド洋、インド、およびアフリカ。その歴史的地理的展望」（二五一—二七三ページ）。著者はアフリカの人文地理學專攻のようで、現在はバンガロールのインド宇宙調査事業團に勤務している。著者の主張するところは古代から少くとも十九世紀まではインド、とくに南インドとアフリカ東海岸との間には密接な貿易關係が存在していたということである。アフリカとインドとの貿易關係においてジambuウェの製鐵遺跡の持つ意味を再評價している點がとくに面白い。おそらく製鐵の技術は別としても、そこで生産された鐵が、金、銅、奴隸など、インドで高價に取引される商品を手に入れるために用いられたことは充分に考えられるからである。著者は次にヨーロッパ人のインド洋進出について觸れ、さらにポルトガル人がアフリカ東海岸でさかんに奴隸貿易に従事したことを指摘している。そしてヨーロッパ人のアフリカ東海岸への進出がヨーロッパからサハラ沙漠を南下したり、あるいは喜望峰を経由するよりも、むしろインドを経由した場合のほうが多いことを指摘し、その意味でヨーロッパ人はインド人のあとを追つてアフリカ東海岸に進出したようなものだ述べている。最後に著者は十八世紀、十九世紀におけるアフリカの地圖の作成について簡単にふれている。

八、近藤治「ムガル帝國時代の日本とインド洋。とくにグジャラートを中心として」（一七四—一九〇ページ）。著者は追手門學院大學教授で、ムガル帝國史を專攻している。著者はこの論文で古代以降の日本とインドとの關係を簡単に述べ、さらにムガル時代の日本とインドとの關係、具體的にいえばグジャラート商人によつて東南アジア方面に輸出された綿織物が日本にも多量に輸出されていたこ

と、その代價として日本産の銀が日本からインドむけに輸出されていたことを述べている。概括的な記述ではあるが、當時の日本の海外貿易についてとくに知識を持たない人々にとっては驚きをよびおこす論文であるといつてよい。

九、B・アルナチャラム「インドの傳統的航海術と地圖作製術における港灣發見法」(一九一—二二二ページ)。著者はボンベイ大學教授で、同大學地理學科主任である。なおここで港灣發見法と譯したのは Haven Finding Art のことで、航海中の船舶がどのようにして目的の港灣を發見するかという方法のことを指す。著者はまず風と星を目標としたインドの傳統的な航海術を述べたのち、傳統的な方位盤について述べている。ついで航海圖(現在の海圖とはことなる概念であるのでこのように呼ぶことにする)がどのようにして作られ、どのように利用されて來たかを實例を擧げて詳しく説明している。この論文から明らかにすることは、われわれがインドについてアラブ人のものとして受取っている情報のかかりの部分はアラブ人の發見したものではなく、インド人の持っていた情報がアラブ人によってアラビア語で記録されたものだということである。著者は最後にこうした傳統的航海術が現在では急速に消滅しつつあることと、それを保存する必要があることを力説している。

一〇、インマヌエル・ワラーシュタイン「インド亞大陸の資本主義的世界經濟への吸收」(二二二—二五三ページ)。著者ワラーシュタインはニューヨーク州立大學教授で、『近代世界システム』(一九七四)の著者として我が國でもよく知られている。著者はこの論文でインド亞大陸がどのようにして資本主義的世界經濟システムの一部分となつて行くかを明らかにしようとしている。彼の主張によれ

ば、ヨーロッパ勢力はインド洋世界に進出してからも、それを決定的に近代世界システムの中にとりこむことはできず、それが可能になつたのは一七五〇年から一八五〇年の間、より正確には一七五七年のブラッシーの戦いから一八五七年のセポイの反亂までの時期であつたと主張している。つまりそれはイギリスのインド亞大陸支配によつて可能となつたのだということである。一七五〇年以前にはインド亞大陸は自己完結的な經濟單位であつたのが、この時期に鹽、砂糖、綿花、アヘンといった一次産品の輸出國になつてしまい、資本主義的世界システムの一部分となつてしまつたのである。著者はそれがイギリスの手によつてどのように行なわれたかをかなり詳しく述べている。そして著者は最後にインド亞大陸はイギリスの植民地支配によつて「近代化」にスタートしたという、いわゆる發展段階説に對する批判を述べて結びとしている。

十一、F・J・A・ブルーズ、K・I・マクファースン、P・D・リーヴス「技術と帝國。インド洋の近代的港灣の建設」(二五四—三〇一ページ)。ブルーズ氏は西オーストラリア大學史學科準教授、マクファースン氏はオーストラリアのヤーティン工業大學社會科學部上級講師、リーヴス氏は同大學副學長補佐兼インド洋研究センター運營委員長である。三氏は共同で『インド洋地域における社會的相互作用的場としての港灣と港市。豫備的歴史的的研究』(一九八一)を出版している。この論文はおそらく同書の内容を要約したものと思われる。さてこの論文はこれまでのそれといささか趣を異にし、技術史の論文である。著者たちはまず十九世紀以降のヨーロッパとインド洋世界との間の汽船による海運の發達を述べ、さらにインド洋世界にはそれに對應できる天然の良港がなく、近代的

港灣の建設が必要とされるに至ったことを述べている。そしてマドラスを例にとって近代的港灣建設の過程を詳しく述べている。ついでダーバン、コロンボ、バタヴィアなど他の港灣の例をあげ、さらに港灣行政の発展についてもふれている。このあたりが、この論文を純技術史的なものに終らせていないところである。そして最後に近代的港灣建設の意義についてふれ、それがヨーロッパにおいてのみ調達できる巨額の資本により、ヨーロッパ人によって發達させられた技術で建設され、そのことにより、いわばヨーロッパ人による支配の具體的な姿を示したものであったと述べている。

十二、S・パッタチャリア「十九世紀および二十世紀初頭のインド洋」(三〇二—三二六ページ)。著者は編者と同じくジャワハルラル・ネルー大學教授で、インド近代史専攻である。彼の著書の中では『イギリス人支配者の經濟的基礎(一八五八—一八七二)』(一九七二)がよく知られている。著者はまずヨーロッパの技術的な優越性がインド洋世界をヨーロッパ人のつくりあげた資本主義的世界システムに従属させる結果になったことを説いている。またその結果としてインド洋世界の内部ではこれまでに見られない人口移動が生じ、また貿易も世界システムとインド洋世界を結びつけるためのものとなり、その結果としてヨーロッパ勢力によるインド支配が成立したと述べている。

十三、G・ボンダレフスキー「ベルシャ灣、イギリスの湖となる。十九世紀および二十世紀のインド洋におけるイギリス支配」(三一七—三三三ページ)。著者はソ連科學アカデミー社會科學研究所國際關係社會學部長である。著者はこの論文でイギリスの商業資本がベルシャ灣を次第にいわばイギリスの湖にして行った過程を

述べ、その中でイギリスの官界、政界、財界にあった中東グループの役割が大きく、それがまたイギリスの外交政策の決定にも大きな影響を与えていたが、それはほぼ一九一〇年代で終ったことを述べている。

三

さて以上で序論を除く十二篇の論文の内容を簡単に紹介した。古代から二十世紀初頭に至る長い時期のインド洋世界に關するさまざまな問題を取扱ったこれらの論文が全體としてどのような主張をしているのかをまとめることはむづかしい。その最大の理由は、この十二篇の論文がインド洋國際セミナーで發表されたペーパーの中からどのような規準、ないしは編者の方針によって選擇されたのが明記されていないからである。編者サティシュ・チャンドラ教授は本書全體をつらぬく問題意識として次の三點をあげている。

A. インド洋周邊の國々に住む人々は古代における航海術、大洋と氣流の研究、造船術と貿易の發達に對してどのような役割をはたしたか。

B. ポルトガル人の來航以後のアジアの貿易ネットワークの性格と、いつ、なぜそれが崩壊しないしは世界資本主義システムに従属するようになったか。

C. インド洋とその周邊に住む人々に對して新しい世界秩序の與えた衝擊。

私の考えではAに關連する論文(ただしこの場合「古代」を「近代」と讀みかえたほうがより適切である)は二、三、四、五、七、八、九であり、Bに關連するものは六、七(重複)、八(重複)、

一〇であり、Cに關連するものは十一、十二、十三である。Aに關連する七つの論文はそれぞれ特定のトピックを取扱つてはいるが、全體として一つのまとまりがあり、ほぼ一五〇〇年以前のインド洋世界の貿易と海上交通についてそれなりのイメージを得ることができる。従つて排列の順序としてはむしろ九を五の次、六の前に置いたほうがよかつたと思われる。

Bに關する四論文の中、本格的なものは、八、一〇の二論文であるが、これでは残念ながら不十分である。少くともオスマン・トルコ帝國とインド洋世界との關係、およびインド洋世界におけるオランダ東インド會社の活動に關する論文がなければならぬ。この點がまことに惜しまれるところである。

Cに關連する三論文はそれぞれ興味深いものであるが、これに加えてインド洋世界における近代奴隸制度の問題、およびワラシシュタインの論文とは異つた角度からインド洋世界におけるイギリスの活動を記述した論文があれば非常によかつたと思われる。

以上全體として本書はAに重心が偏りすぎているように思われる。

個々の論文を比較すると、その構成や内容の精粗はさまざまである。これはもともと國際セミナーで發表されたペーパーであることを考えるとやむを得ないことである。日本語による場合はどうではないが、英語による場合でも、口頭發表の補助資料として書かれたペーパーと、まず論文として書かれたペーパーに基いて口頭發表をする場合とでは、その構成や内容にかなりの差が生ずるものである。この點では『インドとインド洋』のほうがまとまりが良いことは事實である。またジャケットにインド洋の古地圖を配したアイディア

は良いのだが、巻末にインド洋世界の地圖をつけるべきではなかつただろうか。

次に本書の持つ積極的な意義を指摘しておこう。それはなんといっても、とにかくインド洋世界の歴史全體を取扱っていることである。さらにその歴史を古代から一七五〇年まで（それをさらに一五〇〇年以前と以後の二つの時期に區分する）、一七五〇年から一八五〇年まで、一八五〇年以降の三時期に區分したことである。前に述べたチョードフリの著書はこの意味で第一の時期を取扱った業績であり、『インドとインド洋』は第一の時期の第二期を取扱った論文集である。このように時代區分を設定することによつて、インド洋世界全體とそこに含まれる個々の國々や地域の歴史を有機的に關連づけて研究することが可能になるものと思われる。その結果インド洋世界の崩壊もしくは資本主義的世界システムへの從屬化をもたらした「相互に關連のないさまざまな現象」と呼ばれるものの本質をさらに明らかにすることができるようになるものと思われる。そうした意味において本書はインド洋世界の研究に對して大きな貢獻をしているといふことができる。

註

- (1) Auguste Toussaint: *History of the Indian Ocean*, The University of Chicago Press, 1966.
- (2) Fernand Braudel: *The Mediterranean and the Mediterranean World in the Age of Philip II*, 2 vols., London, Collins, 1972.
- (3) K. N. Chaudhuri: *Trade and Civilization in the In-*

dian Ocean. An Economic History from the Rise of Islam to 1750, Cambridge University Press, 1985.

(4) Ashin Das Gupta & M. N. Pearson, eds.: *India and the Indian Ocean. 1500—1800*, Oxford University Press, 1987.

New Delhi, etc.: Sage Publications, 1987. 334 pp.

櫻井由躬雄著

ベトナム村落の形成

——村落共有田＝コンディエン制の史的展開

高田 洋子

(1)

一九六五年から一〇年に及んだアメリカのベトナム軍事介入は、日本のベトナム研究に重要な変化をもたらしたことは誰しも認めることであろう。日本のベトナム研究は「東洋史學」の學問的蓄積のうえに漢文史料の涉獵・解讀を得意とする傳統を特徴としたが、超大国アメリカに對するベトナム民族解放闘争に觸發された新しい研究者たちは、ベトナム民族の獨自性と歴史のダイナミズムの解明に深いまなざしを注ぎ始めた。本書の著者である櫻井氏の一連の研究をはじめ、ベトナム研究の活性化はそのような時代の産物である。本書は、ベトナム前近代史研究に新しい地平を拓いた力作である。

ベトナム村落共同體は、一九六〇年代のアジア的生産様式論争のなかで世界的に注目を浴びたが、ベトナム現代史においても、「村落」は常に重要な歴史發展の役割を擔ったといわれる。例えば一九五〇年代の北部の農地解放における村落共有地の分配、あるいは六〇年代北部の農業の社會主義化＝合作社化の成功、また抗佛・抗米戦争における村落民衆の自衛力・組織力は人民戦争を戦い抜く基盤であったとしばしば指摘される。